

鬼瓦のルーツを尋ねて 韓国へ (31)

前橋市 富山 弘毅

韓国から届いた 珍しい鬼瓦の写真

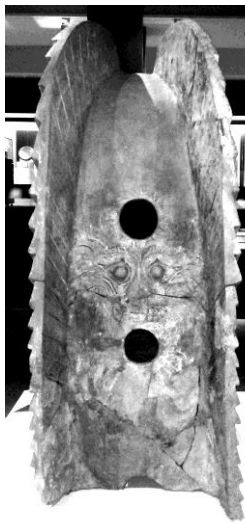
韓国東北部の江原道（ガンウォンド）の旅からもう1年になろうとしています。最終日の通訳・金桂華さんにこの連載紀行文を毎月、メール添付で送り続けています。彼女はそれを韓国語に翻訳して金在煥会長に届けてくれています。韓国の読者で、大切な協力者です。

おかげで、金在煥会長から2度にわたって「珍しい鬼瓦を博物館で見つけた」と、写真が送られてきました。それをご紹介します。

興徳寺出土の鬼面紋鴟尾

鴟尾（しび）に鬼（トッケビ）がデザインされているのは、初めて見ました。

金在煥会長の説明では、この鴟尾は忠清北道（충청북도チュウチヨンブクト）清州（청주チヨンジュ）市の興徳寺（흥덕사フンドクサ）の金堂の上に載せられた物で、模様と形で見れば



清州・興徳寺金堂址出土の鬼面文鴟尾。下は部分。



新羅中期以前のものと推定されるそうです。

金桂華さんの調べでは、興徳寺は統一新羅時代のお寺で、1985年の発掘で金堂址、講堂址、西回廊址の遺構だけ確認されました。



現在の興徳寺 金堂（鴟尾あり） 清州市

世界最古の金属活字本の地

1377年、この地で金属活字を使って発刊された通称「直指(チッチ)」または「直指心体要節(チッチシムチェヨジョル)」(史跡第315号)は、高麗時代の禅僧、白雲和尚景閑により著された仏教書籍で、現存する世界最古の金属活字本として知られ、2001年にユネスコ世界記録遺産に登録されました。(正式名称は「白雲和尚抄録仏祖直指心体要節」)。

禅の要諦を悟るのに必要な内容が記されているといわれ、上下巻からなり、現存するのは下巻のみで、現物はフランス国立図書館に保管されています。

ここにある「清州古印刷博物館」は、木版印刷から金属活字に至るまでの韓国における印刷文化を紹介すべく1992年に設立され、世界的文化遺産である「直指」

の影印本をはじめ、古書や印刷器具など約2,600点の遺物を所蔵しています。

ヨンセ
延世大学に鬼面文軒平瓦



軒平瓦に鬼面が描かれているのは金會長も初めてだそうです。原州にある著名な延世（연세ヨンセ）大学校の博物館に展示されているものです。（写真・上）



ヨジュウモガ博物館 展示

ヨジュウ モガ
驪州の木芽博物館

以下は京畿道（경기도キョンギド）の驪州（여주ヨジュ）にある木芽（목아モガ）博物館に展示されているものです。私が訪問した神勒寺よりも、更に東に位置し、車がないと不便な場所にあるそうです。

仏教木工工芸家の方の作品の数々が展示されており、木製だけでなく、石造や鉄などを加工した仏教関連の作品が、野外や本館内に多数展示されているそうです。



ヨジュウモガ博物館 展示



ヨジュウモガ博物館 展示



ヨジュウモガ博物館 展示

인공무늬수막새
人面瓦當 Roof-end Tile with Mask Design
소재/材質
종종 아연이 함유된
회(1544(1985) 추정)
고려/高麗
경주/京州府
정8703(1985) 추정



ヨジュウモガ博物館 展示 鬼面文軒丸瓦

日本建築にはない 瓦などの名称

私はまた、鬼瓦など建物に飾り付けてあるものの名称などを質問しました。訪韓したときに聞きそびれていたことです。



釜山 仙巖寺 大雄殿 南西



釜山 三光寺 梵鐘楼 南西

左上の仙巖寺の写真につけた①～③の番号の部分の名称を質問しました。回答はすぐ寄せられました。

①は立体的な龍で日本流に言えば「龍面紋鬼瓦」。私が名づけて「龍頭瓦」。

韓国ではヨンニュ（용뉴龍鈕）と呼ぶそうです。

②は、日本の建物には構造上、この種のものはないと思いますが、あえて名前をつければ「鬼板」でしょうか。

韓国ではトケビ（鬼）紋のマンワ（望瓦）だそうです。一般に「マンワ（望瓦）」は棟の先や棟の隅に置かれ、周囲を見回す（望む）ような役割をしていて、日本建築の棟先瓦、棟端瓦又は隅瓦に相当し、鬼瓦と呼ぶ場合も多くあります。

③も日本にはまったく例がないと思いますが、日本にあれば「鬼絵」とでも呼ぶ以外にはないでしょう。

韓国ではもともと「トケビの絵」で、いまでもそう呼びますが、1900年以降になってから「龍」とする見方になってきたそうです。視覚的な効果と悪い気運を追いつく意味を持っているそうです。

④は三光寺の写真（左下）につけましたが、日本ではこのように鬼瓦の下に突き出るものではなく、あえて名前をつければ「棟端瓦（むねはしがわら）」でしょうか。

韓国では、④も①と同じで、ヨンニュ（용뉴龍鈕）だそうです。

巨大な龍頭瓦は戦後の作品

①は、日本の鬼瓦では考えられないほど巨大なものが多く、デザインには、仙巖寺のようにリアルな龍と、三光寺のように造形化された龍とがあります。

しかし、いずれも、私の見学した限りでは、博物館、民俗資料館などにはまったく展示されていません。もしかしたら、古いものではないから、歴史的文化遺産とは言えないのかもしれませんが。

「そうだとすれば、いつごろから作られはじめ、いつごろ普及したものなのでしょ

うか。たとえば慶州の望月寺（拙稿 21 参照）には立体的な龍面紋鬼瓦が四方に載っており、屋根には草がぼうぼうと生えている状態で、廃寺のように見え、かなり古い寺のように思えるのですが。」

こういう私の質問に、金会長は「ご指摘の通り、あんまり古くないデザインです。たぶん 1940 年代以降から作られ、普及されたとみられる」と回答しました。望月寺は古そうでいて、戦後の建物で、瓦の素材も劣化しやすいものだったのでしょう。

1945 年に韓国は日本から独立し、建築物も「復興」しはじめたのでしょうから、要するに「戦後の作品」ということなのでしょう。とすれば、この半世紀で韓国全土に普及した勢いはすごいものです。

鬼瓦のルーツ探しの結論 韓国踏査で確かめたこと

「日本の鬼瓦のルーツ」を探って書物を読んだり韓国を歩いたりしてはっきりしたことは、大体次のような点でした。



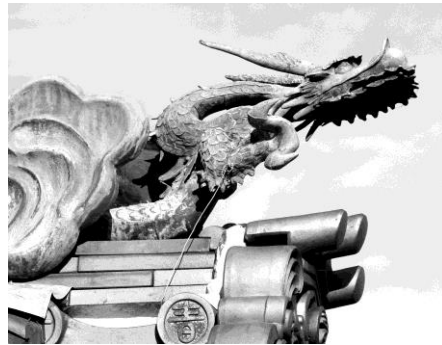
①日本の鬼瓦のルーツをたどると、新羅、百済に直接の祖先があり、これらが飛鳥・奈良時代までに日本に伝えられて原型になったことは明らかである。

②鎌倉時代から江戸時代にかけて、日本の鬼瓦はまったく独自の発展を遂げた。角を飛び出させ、牙をむき出した怖い顔にさまざまな飾りをもつけた立体的なデザインの鬼面文鬼瓦は、日本独特のもので、他国には類例のないものとなった。今日の日本の鬼瓦に類似する立体的なものは、現在の韓国や中国にはない。

③現在の韓国で普及している巨大な龍頭瓦（ヨンニユウニユ龍鈕）は、アジア太平洋戦争が終わって韓国が独立してから造られ始めたもので、歴史的には新しいデザインである。同様のものが北朝鮮にもあるかどうかはわからない。

日本には、類似のものはごくわずかな例外をのぞき、ほとんどない。私がこれまで

に発見したのは、広島県福山市の明王院山門（拙稿⑪）と、宇治平等院鳳凰堂、愛知県稲沢市青宮寺手水所の3か所である。



龍頭瓦
愛知県稲沢市青宮寺手水所（上）大棟南、（下）大棟北

④韓国の学界は、これまで日本流に「鬼面瓦」と呼んでいたのをあらためて、2010 年ごろから 3 年ほどの間に「龍面瓦」に変えた。中国では「獸面瓦」と読んでいることもあってか、「獸面」「怪獸面」などの表現をとった博物館もあったが、全体として「龍面」に落ち着いたようである。

韓国には日本流の「鬼」がないこと、韓国の「鬼」は「トッケビ」であって、日本の鬼とは異なるものであること、文化面でも日本に従属していた歴史から脱却して自主独立の民族文化を確立していく過程が急速に進んでいることなどが、明らかである。

⑤鬼面文鬼瓦のルーツをさらに遡ると、中国の南朝、高句麗に原型があり、さらにその源流は周、秦、漢に求めることができそうだ。……ということでした。

では古代中国で、鬼瓦の源流らしいものとして、どんなものがあったのでしょうか。

（つづく）